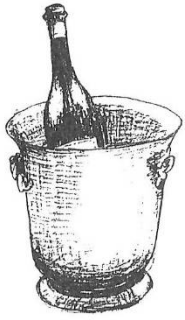
『まんじ』85号(2002.8)

誤解から始まる

新井宏



今度のドラマもまたいつものように誤解から始まった。

奈良に似通う新羅千年の王都慶州は四方を山に囲まれた小さな盆地にある。どこを掘っても遺蹟が出てくるのも奈良と同じで、そのため高層の建物が禁止され、ちょっと近代化に取り残された趣きがあるところだ。

その中央部の南側に位置する半月城は東西千メートル程に三日月状に拡がった台地で、四周に垓字（堀）を廻らせ、内部に王宮があったと伝えられている。慶州を散策するときには、ここに立ち寄ってから住いの晋州に戻るのを習慣としていた。

その日も朝から佛国寺と石屈庵を歩きまわり、足裏にはまめが出来始めていたが、散策の仕上げのつもりで、慶州国立博物館の側から道のないところを半月城によじ登った。半月城の外周部は二重、三重、四重の木立になっているが、内部は芝の広場になっていて、初夏の陽射しが照りつけていた。日陰を求めてちょっと歩き難いが木立の中の瓦礫石を伝い歩いている内に突然ひらめいた。

たしか尹武炳の論文にここから見下ろす南北路のあたりに新羅王京の朱雀大路があり、その幅が百二十メートルだと報告されていたはずだと。それなら大変なことになる。三十年来の私の学説が『三国史記』の古文書で検証されることになる。

……今頃こんなところをのんびり散歩している場合か……すぐに資料に当って見なければ……でも資料の多くは日本に置いてある……それなら金海空港に直行しようか……いやもう今日の飛行便はない……韓国の大學の図書館にだって資料があるはずだ……。

私は永年にわたって、古代の朝鮮半島と日本に共通す

る古韓尺と名づける二十六・七センチの尺度が存在していたことを主張し続けている。研究論文も多数書き、その結果を研究書として出版もしている。その結果、一部の学者には積極的に認められ、韓国ではその本の海賊版が出ているほどであるが、世の中の常で従来学説とぶつかるところもあるため、無視し続けている学者も多い。それは、私の学説が主として考古学的な遺構とか遺物などの間接的な状況証拠に依存していて、古文献の裏づけなど直接的な証拠に乏しいためでもある。

……決定的な証拠がない限り、従来学説に忠実にしていれば間違いはない……第一いままでに従来学説に則って多くの論文を書いてしまっている……アマチュアの学説にうっかり乗っかって笑いものになったら大変だ……。そんな蔭の声が聞えて来るようであった。

だから、私の学説が『三国史記』の記事で裏付けられれば、仮説が定説になる。はやる気持を抑えきれない。かくして、今度のドラマも突然のひらめきで始まった。

しかしそれが誤解であったことが間もなく判明する。美しい誤解はいつも醜い現実によって覆される。

突然のひらめきとはこういう話しであった

慶州には昔から方格地割が残っていて、この方格の単位が約百六十メートルだとする説が古くからあったが、近年になって考古学的な調査が進むにつれてますます確実になってきた。その方格が百六十メートルと言う事実と朱雀大路が百二十メートルであることを組み合わせると『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千一十七歩、三十五里、六部」という記事がうまく説明できるのである。

すなわち「王都長三千七十五歩」の記載は王京が百歩単位の方格に区切られ、中央に七十五歩の朱雀大路を持っていたことを意味しているのではないか。それならば、百歩が百六十メートルで、七十五歩が百二十メートルに対応し、一歩は百六十センチ、一尺は二十六・七センチと計算される。それは、遺構から求めた古韓尺そのものの長さに他ならぬではないか。……もう間違いない……。

はやる気持で次の文章を見れば、「廣三千一十七歩」とある。この十七歩すなわち百尺は古韓尺で計算すれば二十六・七メートルで、これも今までに発掘された古代道路幅の十三・四メートルのちょうど二路分である。ますます確実だ。高揚する気持を抑えきれない。

しかしこの美しい誤解は成立たなかった。百二十メートルの朱雀大路が存在していたとする尹武炳の学説が、その後の発掘調査で否定されていたからである。それに良く見れば、「長三千七十五歩」とは王京の長さを南北

に測った時のことで、東西に走る朱雀大路がその長さに含まれるはずがないではないか。その上、私の見た『三国史記』にミスプリントがあり、「広三千一十七歩」は「広三千一十八歩」の誤りであった。

単に夢から醒めただけなのに、もう前の仕掛りの研究に戻ろうとする気分になれない。

……それにしても良い線を行っていたのに……発掘調査の理解が間違えているのではないか……長を幅の意味で使った例だって探してみればどこかにあるのではないか……。失ったものが大きかっただけにいつまでたっても夢から立ち去りがたく、あれこれと仮説を再構成してみるがうまく行かない。

しかし私には確信に似たものがあった。かってもそんな誤解から始まって深い失意を味わいながら、もっともっと厚みのある着想に至ったことが何回も何回もあったではないか。平坦な道で得た着想には深みがないが、挫折の後に得た着想には何人も到達しえない豊かさがあるではないか。新井君、諦めるな。

そして間もなく本当にもっと素晴らしい夢を見ることになる。美しい誤解が醜い現実に覆された挫折の後に、想像もしていなかったほどの広々とした世界が拡がっていたのである。

心がふたたび高揚するが、いまは伝える言葉を知らない。この感動を伝えるには、ただただ自己の研究遍歴を語るしかあるまい。

ものさしの研究というニッチな世界に目を向けるきっかけとなったのは、森浩一の岩波新書『古墳の話』を読んだ昭和五十年頃のことである。歴史や考古学の本を読んでは、自分勝手な意見を楽しんでいた頃だったので、そこに出ている古墳の大きさとものさしの関係に釘付けとなってしまった。古墳の大きさを測ると中国の晋尺（二十四センチ程度）で完尺（端数のない尺数）を得ると言うのである。

そして古墳の大きさを書いた一覧表を眺めている内に誤解が始まった。数字を見る限り、晋尺よりももっときれいに当てはまる尺度があるではないか。なぜ著者はそんな簡単なことに気付かぬのだろう。私ならもっと合理的な方法で最も良く当てはまる尺度を求める方法を知っている。それは統計学とそれに基くコンピューター計算ではないか。私の出番がやってきたのではないか……。折から、コンピューターが一般企業にも普及しはじめていた。

しかし、着想自体は今考えても優れていて誤解とばかりは言えなかったが、古墳の大きさが規則正しく出来ていると思ったのがそもそも間違いのもとであった。第一、文献によって古墳の大きさがかなり違うし、どこを起点

に測った数値かもわからない。無数にある古墳のどれを対象にすべきかも大きな問題であった。数学的な解析方法は開発できたが、肝心の古墳のデータはとても明解に尺度を語るにはほど遠かった。いくら試行錯誤して解析して見ても満足行く結果は得られない。美しい誤解が醜い現実によって覆されてしまった。

折から専門の学者を含めて、古墳の設計や尺度について多くの学説が出され始めていた。しかし、どのアプローチを見ても主観的、恣意的に過ぎていて納得の行くものではない。私も一日も早く自説を発表したいと思いながらも、すっかり行き詰まってしまった。ただただ、いつの日にかコンピューターを使った解析方法が脚光をあびることを信じて、余暇を見つけては全国の古墳の計測図面を集め続けていた。

しかし四十歳代のサラリーマンが自分だけの時間を持ち続けることは難しく、いつのまにか情熱も醒めてしまった。

それからちょうど十年近くたった昭和五十八年のことであった。仕事上で責任を取る形で選手交代する時期がやって来た。研究部門を担当することになったのである。左遷の意味が込められていた。

しかし、この職場が私の人生に幸運を呼び込こむきっかけとなった。美しい誤解が醜い現実に覆され、そしてもっと大きな夢を育む。そんな研究の世界がよほど体質にあっていたらしい。ヒットが出始めた。

そして仕事上で博士号を必要とするというので、取り組んでいた研究で、全く期待もしていなかったような理論を編み出すことに成功した。神仏を信じない私が神仏の加護を感じた瞬間であった。

仕事が再び順調にまわりはじめ、精神的に多少の余裕が持てるようになり平成と年号が変わる頃から、また尺度の研究を再開しようという気持が高まった。

ひとつの突破口となったのが、古墳ばかりでなく、古代宮殿や古代寺院にも目を向けることであった。そこで出会ったのが、かの有名な「法隆寺再建・非再建論争」である。

わが国の歴史論争史上、最もよく知られているのは「邪馬台国論争」といってよいだろう。専門の学者の間では、大和説が有利であるが、アマチュアには北九州説が多く、いまだ両説が拮抗していて、考古学的な新発見がある度に新聞紙上を賑わしている。この状況はこれからも当分続くであろう。しかし日本の歴史論争史上もっと有名だったのが「法隆寺再建・非再建論争」である。

実は、この大論争も一部の学者の美しい誤解が始まりであった。『日本書紀』には天智九年（六七〇）に「法隆寺が一屋あますことなく焼失」と書いてあるにもかか

わらず、建築様式の研究者の関野貞が明治三十八年これを推古朝すなわち飛鳥時代の建築であるとして「非再建論」を唱えたのである。それは様式論からすれば尤もな主張であった。どう見ても唐の文化が大量に流入した白鳳時代以降にこのような古風な建物が建てられるはずが無かったのである。

この関野貞の「非再建説」は折からの日露戦争で高揚したナショナリズム的な世論に熱烈に受け入れられた。法隆寺が例え再建であったとしても世界で最も古い木造建築であることには変わりがないが、国民感情としてはもっともっと古くなければならなかった。聖徳太子の創建した寺そのものでなければならなかった。

これを強力に支えたのが美術史家の平子鐸嶺であった。古籍に通じるこの新進気鋭の平子は様式論とともに史学の面からも「非再建論」を次々に立証した。あたかも「非再建論」が完全に歴史学界に受け入れられたかの様相を呈した。

これにびっくりしたのが文献史家達であった。すくなくとも大化改新以降の書紀の記述には信を置く彼らにとって、書紀の書かれるわずか六十年前の出来事が間違いであって良いはずがない。それまで一度も法隆寺を訪れたこともなかった若き日の喜田貞吉が「非再建論」に戸惑う恩師小杉温邨に代わってするどい反論の筆をとる。これが大論争の始まりであった。

学者ばかりでなく一般人を巻き込むような大論争の条件は、テーマが判りやすいことである。この誰にでも判る「燃えたか燃えなかったか」と言うテーマは、専門学者ばかりでなく、多くの歴史ファンを惹き付け、以降三十年以上に渡って延々と繰り広げられることになった。

しかしこの問題は昭和十四年に実施された若草伽藍の発掘調査により、突然幕が下ろされてしまう。若草伽藍の一部が、法隆寺西院伽藍の一部に重なっており、「非再建説」が成り立たないことが判明したからである。美しい誤解は醜い現実によって覆されてしまった。

ところでこの論争において、非再建論者が一貫して主張したのは、法隆寺が高麗尺により造られているという点であった。それは、法隆寺の建物を詳細に測ればすぐに判ることであるが、この建物が七世紀中頃以降の公式尺すなわち唐尺（二十九・七センチ程度）で作られたとは到底信じられなかったからである。ここに高麗尺が華々しく登場した。

もっともその頃、高麗尺と言う尺度の証拠があったわけではない。平安時代の書『令集解』や『政事要略』に、それらしき記事があり、解釈によっては大化以前に唐尺より二割長いものさしが存在していたと考えられることと、それが中国の東魏尺に近いことが最大の根拠であった。そして高麗尺を、法隆寺の建物に当てはめて見たと

ころ唐尺よりもはるかに良く合ったのである。

たしかに有力な論拠であった。しかし法隆寺が高麗尺すなわち東魏尺で作られたと言う説も今となってみると美しい誤解であった。

それは東魏尺が唐尺の二割増しではなく、唐尺と同じ程度の三十センチであることが今の中国では定説となったからである。すなわち『隋書律歴志』に書いてある東魏尺が晋尺の一・五〇〇〇八倍という記事は誤りで『宋史律歴志』にある一・三〇〇〇八倍が正しいことが検証されてしまったのである。

しかし一度日本で信認を得た東魏尺は、日本や韓国の学者たちを惹きつけ、未だ東魏尺に基く考察が相次いで行われている。藤村新一による旧石器捏造に乗って大合唱をしていた考古学界と同じ構造で、皆で渡れば恐くない。

法隆寺建築に高麗尺を当てはめて見ると多くの寸法が良く合うことは確かであった。しかし全てがうまく合っている訳でもなかった。高麗尺を知らない者が、法隆寺を詳細に調べれば、百人中百人がもっと良く合う尺度を示すはずである。それが古韓尺の長さである。古韓尺なら建物細部にいたるまで実に良く一致するのである。しかし古韓尺などと言う記録はどこにも無いし、法隆寺にだけうまく適合してもそのことだけでは誰も認めるはずがなかった。

それからは夢中になって古代寺院の寸法を渉猟した。そして法隆寺に続いて法起寺も法輪寺も古韓尺に良く合っていることを知った。しかしまだまだ不十分だ。そして発掘調査に目を向けると日本最初の寺院飛鳥寺遺蹟も古韓尺に良く合っている。その他の飛鳥・白鳳寺院遺蹟も正確な寸法を得ることができなったけれど、古韓尺なら矛盾がない。ますます確信が深まる。

しかし、尺度問題の恐いところは「そう思って見るとそう思える」ところにあった。恣意的な解釈なら誰にでもできる。誰でも納得できる客観的な判定基準でなければ、いわば水掛け論に終わってしまう。これを如何にして乗り越えるか。そして想い至ったのが古墳の尺度を論じる時に開発した統計学利用によるコンピューター解析法であった。しかもかってはコンピューターを個人で使うことなどなかなか望めなかったが、パソコンが簡単に使える時代が始まっていた。

例え不正確であっても数多くのデータを解析すれば真の姿が浮かび上がってくる。それが統計学の教えるところである。法隆寺のように品質の良い測定値はこれからはいくら望んでも簡単に手に入る訳ではない。しかし、不正確で良ければいくらでもデータはあるではないか。発掘調査報告書を求めて国会図書館通いが始まった。そ

して当然の帰趨として朝鮮半島にも目が行った。

時が熟していた。この頃から韓国では古代寺院の学術調査がいわば国の威信をかけた形で行われ始めていた。その中でも慶州の皇龍寺跡の調査は絶好な資料を提供してくれた。東大寺を凌ぐこの巨大寺院跡には、礎石を残した九重塔、金堂、講堂や廻廊が残っていたからである。そして古墳や宮殿、寺院の膨大なデータが手元に集まった。さあどうやって料理するか。

とにかくデータをコンピューターで機械的に解析し、その結果を時代・地域別に並べて見ることにした。そして驚いた。期待していた以上に、古韓尺が色濃く浮かび上がってきたのである。

いつのまにか五十路に入り、相変わらず仕事と格闘する日々であった。時間の余裕があるはずがなかった。しかしサラリーマン生活にも波があり、ちょっとした失意を味合う時に、あたかも代償を求めるかのように夢中になって論文を書き始めた。心の中では、博士論文の時の「柳の下の泥鰌」を再び狙っていたのかも知れない。書き出しは順調であった。

しかしそんな時に限って、仕事が順調に回りはじめ、時間が足りなくなる。朝早く起きて書き進めるしかなかった。もう勢いは止められない。それが例え美しい誤解に基いたものであっても、もう後ろ戻りはできなかった。

そして三篇の論文を書き終えて、それをもとにして『まぼろしの古代尺』という研究書を脱稿したのが、平成四年のことである。

もともと本として出版することが前提であった。地味な研究誌にアマチュアの論文を発表しても専門家からは無視されることぐらい良く承知していた。だから研究成果は本として紹介しなければならなかった。それも歴史や考古学の世界で権威ある出版社でなければならなかった。しかしそんな願望を簡単に受け入れてくれる出版社があるはずがないことも良く知っていた。

失うもののない者の強さであった。とにかく迷わず第一希望の出版社からアタックすることにした。吉川弘文館である。誰の紹介もなく草稿を送ってみた。

人生にはつきがある。いままでも随分ついていた人生であった。しかしこの時ほどつきを感じたことはなかった。編集者がかって高麗尺に疑問をもった経験のある方で、とにかく出版を検討してくれるという。吉川弘文館と言えば、専門の学者でさえそこで本を出せば勲章になる出版社であった。定説にもなっていないアマチュアの本など余程のことがなければ引き受けるはずがなかった。それが本にしてくれると言う。

ただし出版社の知恵もあって本のタイトルは研究書としては異例の『まぼろしの古代尺』となっていて、逃げの姿勢があったが、その代わり異例の三千部を初刷して

くれた。有名な歴史考古学者坂詰秀一先生が新聞書評でも取り上げてくれた。神仏の加護を再び感じた。

出版が終わってしまえば一段落と思っていたのが大間違いであった。背伸びをし過ぎてしまった。いたるところに美しい誤解が満ち満ちていた。そのことにはまず自分で気がつき次に読者が教えてくれた。自分ではこれしかないと思った論理も冷静になれば、別の見方もあった。使ったデータがミスプリントだった場合もあった。晴れがましい本を開くのが恐いと思う日もやって来た。しかし基本的な間違いではない。何とかしてもっと自論を強化したい。世の中にはそんな資料が必ずあるはずだ。

またデータとの格闘がはじまった。突破口があるはずだ。それを求めて毎朝五時には起きだして机に向う日々が続いた。段々深みにはまり、朝鮮半島の中世から近世にかけての計量史や土地制度史の研究、それに中国の土地制度研究史にまで手をひろげるようになった。

その結果、生まれたのが、中国・朝鮮半島・日本にまたがる壮大な土地制度史の構想であった。主観的には個々の構想を繋ぎ合わせれば、自然に出来上がる構想であるが、他人に説明するには肝心の古韓尺がもっと直接的に検証されなければならないし、その古韓尺による土地制度の証拠が見つからなければならない。そのミッシングリンクをいかにして探すか。それはかならず朝鮮半島にあるはずだ。韓国に行きたい。

そんな姿を見ていた妻が言ってくれた。……早く会社を卒業して、韓国に行っていらっしゃい……。この一言が決定的であった。

私たちには武という知的障害を背負った子がいる。この子が果たして、ひとりでバスに乗れるようになれる日が来るであろうか。それが、初めて異常に気づいた時の想いであった。その武が今では、社会福祉法人の工場でお給料を貰って働いている。ゆっくりではあるが確実に一歩づつ進んでいる。その進歩を見る度に、私たちふたりは喜び合ってきた。夫婦の気持ちがひとつになるのはいつも武のことであった。だから、その子を置いて韓国へ行くことなど願望にすぎなかった。しかし武のためにも良いかも知れないと妻は言ってくれる。嬉しかった。

そもそも韓国に行きたいと思ったのは、史遊会の外谷正之さんの影響である。外谷さんは定年で職場生活に区切りがつけると同時に韓国の大学院に陶芸の研究のため留学した方である。そう言う方法があったのかとても新鮮な思いをした。

アマチュアとして研究していると、アマチュアの良さ悪さが良く判ってくる。それと同時に何かと専門家をけなしながらも、専門家の本当の凄さも判ってくる。だか

ら、自分の学説を本気で専門家に認めさせるにはよほど強固な証拠を見つけるか、または専門家集団の内側に入って同じ論理で発言して行くしかない。そのためには、日本でも韓国でもいいから大学院に入学するのは妙案である。……いやもっと妙案がある……大学の先生になってはどうか……もちろん、歴史や考古学の世界で、大學の先生になれるわけがない……あるとすれば金属工学の分野だが……。

たまたま博士論文の時に見出した理論は金属工学の分野ではちょっとした勲章となっていた。これに民間会社出身ということを逆手に取ってアプローチすればチャンスは十分にある。

願望は口に出してみるに限る。口にすることで道が開ける。そして親しい友達の前では会社を卒業したら韓国で大学の先生になるのだと公言するようになった。しかし何か具体的な話があったわけではなかった。

そうこうする内に、平成十一年には会社卒業が現実のものとなった。しかも非常勤顧問と言う願ってもない待遇をしてくれると言う。いよいよ古韓尺学説の完成を目指して動ける環境が整った。

ところが現実は皮肉であった。もうひとつの趣味の金属考古学の研究が目前に大きく拡がってきたのである。会社卒業までは職業としての金属を表に出した活動は無意識の内にひかえていたが、制約がとれた途端、蓄積があっただけに、いきなり一軍入りしてしまい、引くに引けなくなってしまった。それだけに成果も面白いほど上がった。古韓尺の研究に比べれば、何をやっても論文に書ける気分であった。

そんなある日、韓国で講演をして欲しいという話がふたつ飛び込んできた。そのひとつが外谷正之さんを経由してであった。チャンス到来である。講師の略歴を送るようにとの連絡に、「待ってました」とばかりに送ったのが、私の特製履歴書である。

韓国語で書いたその履歴書には、実に巧みに自己宣伝を織り込んでおいた。韓国の歴史や考古学にあこがれを持つ日本人としても、金属工学の専門学者としても、高度成長期を生きぬいた企業人としても、どの点から見ても関心を持ってもらえるように書いた履歴書であった。あわせ技で一本というのがあるが、てらいもなくそれを狙ったものであった。

それが慶尚大学の日本文化研究所名誉教授姜東湖先生の目に留まり、実行力抜群でオーバーランなど全く気にしない金属工学科の許甫寧教授に手渡されたのが幸運であった。そして平成十三年の初めから韓国での生活が始まった。

教授と言う名称は予想通り私の研究活動に大変好都合

であった。名刺には慶尚大学教授とだけ書いて、工学部とは書かない。相手が歴史か考古学の先生と誤解することは一向に構わない。それをひそかに期待しているのだから。

それに私の名前は韓国の歴史や考古学の関係者の間では多少知られていた。いくつかの講演会を頼まれるたびに、知人が加速度的に増えていった。その時にも慶尚大學教授の名前は効果的であった。韓国は日本よりも肩書の世界であり、日本よりも教授の地位が高かった。

韓国では早速古韓尺の研究を始めるつもりであった。しかし初めは、金属考古学分野を優先した。書くべきテーマがたまっていたし、折から韓国の慶州で開かれる第五回の金属考古学の世界会議にも論文を二件提出する予定があり、金属工学科の教授という立場もあったからである。それも一ヶ月ほど前に終わった。その慶州がまた私の古韓尺研究に火をつけることになった。

『三国史記』や『三国遺事』の記載が古韓尺の文献的な証拠になるという確信には変わりがなかったが、尹武炳の朱雀大路説が否定されていたのは痛手であった。なんとか敗者復活の道はないかを模索し続けた。そして思い付いた。

『三国史記』の「王都、長三千七十五歩、廣三千一十八歩」に出てくる七十五歩と十八歩は共に九の倍数になっているではないか。すなわち七十五歩は四百五十尺で五十尺の九倍、十八歩は二歩の九倍であり、それぞれが九本の道路幅を意味しているのではないか。それなら王京三千歩を一里（三百歩）ずつに区切った時に必要な九本の道路と一致する。古韓尺の五十尺は発掘遺構の大路十三・四メートルと完全に一致するし、二歩はその四分の一で小路の単位だ。

そう気がついた途端、全てが見えて来た。『三国遺事』にある「京中 三百六十坊 五十五里」の意味は京が三百六十坊と五十五里で成り立っているということだ。計量史を知らない学者は里を距離のことだと思っているから、さっぱり判らないだろうが、里が一里四方の面積を意味するのは常識であり、これは町が距離の単位であると同時に一町四方の面積を意味したのと同じことなのである。

そうであれば王京は方三千歩すなわち方十里であるから面積が百里である。だから王京の総面積百里の内五十五里が村落であり、残りの四十五里の内に三百六十坊が出来ていたことになる。後は簡単に、里の中に方百歩の坊が九つあったことが判る。すなわち三百六十坊は四十里分である。この四十里と五十五里を合わせると九十五里で残りの五里は王宮分に違いない。

そこまでの考察は一本道であった。この結果一坊すなわち百歩が百六十メートルとなり、その尺度は古韓尺と同じ二十六・七センチとの結論がでる。……うまくいっ

た……うまくいった……もうこれで十分だ……。

……でも待てよ、それなら里と坊は王京のどの位置を占めていたのだろうか……確か『梁書新羅傳』には王京の中心部に坊の部分があると書いてあったはずだ……それに『三国史記』には『三国遺事』とは異なって五十五里ではなく三十五里と書いていたではないか……。

これらの疑問が結局最終的に王京復元図に左右対称の美しい配置図をもたらすことになる。そのプロセスを紹介したいが煩わしすぎる。……とにかく美しい復元図だ……その上これらの復元図が従来の学者たちが道路遺構の観察や発掘調査から作っていた復元図に完全に一致するではないか……。また神仏の加護があった。

かくして古韓尺が文献的な証拠を得ると同時に中国・朝鮮半島・日本を結ぶ壮大な土地制度変遷史の神秘のミッシングリンクも見つかった。そして夢中になって論文を書き始めた。

……論文を書き上げない内に飛行機が落ちては絶対に困る……出来上がったらどこの学会誌に載せようか……急ぎたいが安売りもしたくない……それに中国・朝鮮半島・日本の壮大な土地制度変遷史も書かねばならない……土地制度変遷史は計量史ほどニッチな世界ではない……歴史学の根幹部分だ……大満足だ……大満足だ……妻に感謝する……。

かくしてまた美しい誤解が始まっている。